



白色LEDのペンライト

札幌市医師会 塩川 哲男
勤医協札幌丘珠病院

診察室あるいはベッドサイドでの必需品のひとつに、ライトがあります。診察室では懐中電灯でもよいですが、白衣のポケットや往診かばんに入れて持ち運ぶにはペンライトかミニライトでないとは不便です。

私の専門は神経内科ですので、ベッドサイドで瞳孔や口の中を見ることが多く、昔から「軽くて、小さくて、しかし明るい、かつ接触の良い」ペンライトをさがしていました。市販の家庭用のものは安いのですが性能的に今イチで、あるメーカーさんが持ってきてくれた白い胴体のライト（アメリカ製？）はなかなかのすぐれものでしたが、使い捨てのようで、電池が切れるとアウトです。

ミニMAGライト™（アメリカ製）は比較的光が強いのと、焦点（照射範囲）が調節できるので、つい最近まで私はこれを愛用していました。

ところが、先日、看護師向けの通販カタログを見ていると、白色LEDのペンライトが1本900円が出ていたので買ってみました。上記の条件を満たしているのと、LED寿命（約10万時間）はもちろん、電池の寿命も長く（アルカリボタン電池4個で約100時間）、価格もまぎまぎですので、気に入りました。

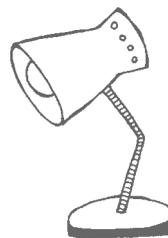
インターネットで調べてみると、たとえばYahoo!™ショッピングの文房具のコーナーにもありますし、自宅近くの電気屋さんにも置いてあります。

業務用に限らず、ペンライトは今後、白熱電球

から白色LEDに段々と切り替わっていく予感があります。

ところで、LEDは何の略かというと、light-emitting diode（発光ダイオード）の略です。ひと昔前は赤いLEDしかなかったのが、青色LED（発明の対価の一部として、200億円の判決がでたアレです）、さらに白色や紫色のLEDが実用化されてきて、今回のペンライトとなったわけです。最近では携帯電話やデジタルカメラの液晶バックライトに使用されているそうです。

そんな新型ペンライトですが、当院は2年ほど前から高齢者中心の療養型病院となり、最近では神経学的診察のためというより、死亡時の瞳孔散大を確認するために使うことのほうが多くなりました。出番こそ少なくなりましたが、私は武士の刀のようにこのペンライトを白衣の胸ポケットに差して持ち歩いています。



江戸っ子の食生活

札幌市医師会 アンデルセン診療所 門脇 純一

日本の食文化は奥深く、多彩である。江戸時代庶民の食生活は、このことを代表するかのようになり、多様であり、貧乏は貧乏なりに、金持ちは豪華に食生活を楽しんだようだ。

長屋の食材は新鮮で、早朝から夕方まで、さまざまな物売りが来て、大きな声で買い人を集めた。あたかも、いま流通の移動コンビニみたいになって来た。画面でよくみる一心太助をすぐ思い出す。

“賄い屋”は、独身の下級武士が利用していた宅配の弁当屋さんだというから、独身の下級武士という言葉を変えてしまえば、今でも即、通ずるから面白い。

江戸庶民は稀にみる外食好きであったという。居酒屋の出現もこの時代で、当初は立ち飲み屋で、家に帰るまで待てない飲んべえが利用したというから、今の東京には、この習慣を持った人が

たくさんいる。しかし、大きな違いは、生活習慣病の頻度差であろう。

井物の第一号は、江戸ではじまり、鰻井である。上方では鰻を腹からさいたのを、江戸では背開きが変わった。江戸は武士が多いので、腹を切るのが嫌われたからというのは、単純ながら、説得力がある。

割り箸は江戸の鰻屋が考案したもので、当初は引割り箸といったらしいが、使用方法に関連した表現であろう。

元禄年間には白米食が普及し、“江戸煩い”と称するビタミンB₁欠乏症・脚気が多発し、將軍綱吉までも、罹患したというから、かの將軍も玄米食でなかったのであろう。衆人は玄米食をといっ、ひんしゅくをかった大臣もあったやに聞いているが、B₁欠乏症の予防を考慮しての配慮とすれば、江戸時代の大臣として、腹をたてずにすむ。

江戸時代の後期には、庶民の食生活も多様となり、グルメブームが起こった。大食い、早食い競争のイベントが催された。こうなると、時代錯誤で江戸時代なのか平成なのか、ふと、分からなくなってしまう。

参考書；中江克己、PHA 文庫、2001

谷川 士清(国学者で医師)

小樽市医師会 野口病院 本間 勉

- 江戸時代の国学者^{たいじん}四大人→荷田 春満・賀茂 真淵・本居 宣長・平田 篤胤
- 谷川 士清の地元PR活動→彼は本居宣長と同郷(伊勢国)で21歳先輩であり、国学者・医師として宣長同様活躍した有名人であるが、故あって歴史的には不遇であった。しかし、地元では宣長を超える偉人として次の様に色々と顕彰している。
 - ①谷川神社→大正11年士清を祭神として建立。
 - ②士清旧宅→国指定歴史建造物(史跡)として

昭和42年に認定。

昭和54年に地元の努力により修復工事完了と同時に一般公開した。

- ③谷川士清の会→平成11年津市にこの市民団体が発足し、彼の偉業のPRが益々活発になり、津市の郷土偉人として学校教育にも採用している。
3. 士清の歴史的不遇の理由
 - ①藩医(御殿医)固辞→津藩7代藩主藤堂高朗は士清の父義章医師の手で出生したこともあって士清に藩医になるよう要請したが、彼は固辞して父同様町医者として一般庶民の医療に専念した。
 - ②反骨精神旺盛→士清は藩の行政を鵜呑みにすることなく、批判し意見を具申したので藩に嫌われた。
 - ③「谷川洞津塾」開設→士清の学問・人格の名

声を募って集まり入門を希望する若人のために享保20年（1735年）“淡齋”と号して左の私塾を開いて国学・医学・儒学等を教え、自らも研究に精進したが、彼の名声が高まり入門者が増加するにつれて、津藩では彼の反骨精神の高揚が倒幕の志士集合の塾と化すことを危惧して弾圧を強化したため門人は離散し塾は瓦解するに至った。

- ④土逸倒幕思想→土清の嗣子土逸も父以上の強烈な反骨精神の持ち主だったので藩は倒幕に走るのを恐れて藩外に追放した。
親子孫三代の反骨精神が土清国学者の名を歴史上から消滅させたらしい。

4. 土清の出自

- ①誕生→宝永6年（1709年）伊勢国安濃部八町（三重県津市八町）で町医者谷川義章の長男として生まれ67歳で没した。

- ②遊学→京都に上京（21～26歳）して下記学者に入門して猛勉強した。

儒学・本草学・・・松岡 玄達

医学・語学・・・福井 丹波守

垂加神道・・・松岡 仲良・玉木 正英
享保20年8月、八町に帰郷し父の家業町医者者の跡を継ぐ。

谷川洞津塾開設し門人に医学・国学・儒学等を教え、自らも研究に没頭した。

このように医療・教育・研究と多忙を極めた

日常の中で次の著作も完成している。彼のバイタリティーには唯々頭が下がる思いがする。

③二大著書

「日本書記通証」→日本書記全巻（30巻）の通釈で35巻（1751年宝暦元年完成）

「和訓栞」→日本最初の50音順国語辞典（93巻）安政4年（1775年）完成し、20,897語あり。

5. 土清と宣長の交友

明和2年（1765年）に土清の日本書記通証を見て学識の深さに感心して宣長が手紙を出したのが交友の始まりである。宣長36歳・土清57歳であった。その後2人は度々率直な意見を交わし切磋琢磨して国学の向上に寄与した。

また、土清が著作の原稿を後世に残すため古世子神社（谷川神社の前身）の境内に“反古塚”を造った時、宣長は門弟と共に祝歌を贈って参列している。

6. 土清家系のすばらしさと驚異

土清が和訓栞93巻を編集したが発刊前に没したので、谷川家では彼の業績を無にしないため代々の子孫が私財を投げ打って順次刊行し、明治20年（1887年）に112年目で全巻を完了したという驚異的執念と情熱には唯々感嘆するのみである。一度谷川旧宅を訪れてその偉業を賛えたいと思っている。

表紙写真

遙かなる山

深川医師会 浦崎 政康

トムラウシ山は標高こそ2,141mと大雪山の中では特に高い方ではないが、山容はどっしりと風格があり登路の長さからしてたやすく登れる山ではない。しかし、いつかは登りたいと憧れる人は多く、百名山ブームのお陰で最近賑わっているようである。登山者が多くなると遭

難者も増え、平成14年には夏のトムラウシ山で2名が凍死した。

撮影した美瑛町新区画からトムラウシ山までは直線にして30km近い距離があり霞んでいる時が多いが、秋は空気が澄み、天気の良い日は遠い山もすぐ近くにあるように見える。